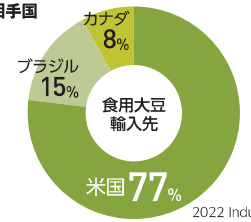
歴史からひも解く「アメリカ大豆」のサステナブルな取り組み

日本で消費される食用大豆のほとんどは輸入品。中でも「アメリカ大豆」が占める割合は大きい。アメリカの大豆農家では、約90年前からサステナブルな大豆生産に取り組んでいる。その歴史から現在の取り組みをひも解く。

豆腐に納豆、味噌に醤油など、日本の伝統食に加え、大豆ミートや大豆ヨーグルトなど、大豆製品の多様化が止まらない。今も昔も日本人の食卓に欠かせない大豆だが、日本の大豆自給率は低く、食用大豆のほとんどを輸入に頼っているのが現状。そして、輸入大豆の約8割を占めているのが「アメリカ大豆」だ。

日本に輸出される「アメリカ大豆」は、日本の大豆製品向けに改良・開発されたもの。30年以上前から、日本の商社・食品会社とアメリカの大豆農家や輸出業者が手を組み、納豆には納豆向けの品種、豆腐には豆腐向けの品種と、それぞれの食品に適した品種を作ってきた。その結果が現在のシェアにつながっている。

日本の食用大豆の輸入相手国



※データ：2022 Industry Data

約90年前から サステナブルな生産に取り組む

アメリカの大豆農家は約90年前からサステナブルな大豆生産に取り組んできた。その背景には、1930年代にアメリカで断続的に発生した自然災害の経験がある。この時の反省から、米国農務省は、自然環境や土地の状態などに配慮してサステナブルな農業を続けることを目的に「土壌保全局」を常設機関としてスタートさせた。年1回の内部監査に加え第三者によるサステナビリティに関する監査が実施されている。

アメリカの大豆農家の多くは家族経営で、そもそも土地やビジネスを親から子、孫へと次世代に継ぐというサステナブルな意識が高かった。

ADVERTISEMENT

「アメリカ大豆」の歴史

1930年代に大規模な砂嵐が発生

1930年代、アメリカで「ダストボウル」と呼ばれる大規模な砂嵐が発生、広大な農地が壊滅的な打撃を受けた。この背景には、土地を深く耕すなどの農法が土地の保全を乱していたという事実があった。この反省から、米国農務省はサステナブルな農業を実現するために、後の「自然資源保全局」を全米各地に設立、監査官を配置した。

サステナブルな農法のカギは不耕起栽培

サステナブルな大豆生産を実現するためのカギを握るのが「不耕起栽培」だ。不耕起栽培とは、文字どおり農地を耕さずにそのまま種をまき、農作物を育てる農法のこと。トラクターなどで耕起作業を行わないことによって、土壌を保護、改善し、健康に保つだけでなく、CO_2の排出を削減するなど、環境保全効果がある。

現在のサステナブルな農法

不耕起栽培
次年度の作物を植える前に土壌を耕さない
土壌の健康状態改善、土壌の圧縮・侵食防止、使用エネルギー節約、CO_2削減。

芝生の水路
畑からの水の流出を遅らせる
土壌侵食が水路に流れ込むのを防止、流出した土砂や栄養分が小川などの水域に入る前にろ過。

カバークロップ
冬の間に麦類などの作物を植える
土壌の健康維持、水の浸透性の向上、雑草の抑制、害虫サイクルの断絶。

精密農業
最新技術を駆使し農場管理を最適化
農薬・肥料等のインプットを最小化、収穫物のロスを最小化、収量・収益性を向上。

サステナブルな大豆であることを証明する SSAP認証マーク

SUSTAINABLE U.S. SOY

環境への負荷が少なく、サステナブルな方法で生産・管理された大豆であることを証明する認証制度で出荷先の要望に応じて輸出時に証明書を発行する。4つのルールに基づきサステナブルに生産された大豆であることを証明する認証マークも発行している。

アメリカ大豆のサステナビリティ認証の4つのルール

1. **生物多様性と生態系の維持**
   生産地域を制限して、森林を伐採せずに、生態系を守りながら生産する
2. **サステナブルな生産活動**
   「保全耕起法」他の法律に基づき、輪作やGPS技術などを活用した精密農業を取り入れ、環境を守りながら生産活動を行う
3. **生産農家の労働環境改善**
   労働者の健康と福祉に配慮し、サステナブルな手法（無駄なエネルギーを使わない、肥料・農薬は最小限に正しく使う、水質を守る）で生産管理する
4. **生産活動と環境保護の継続的改善**
   継続的な生産活動の改善と、環境保護の向上を目指す。これらの実現のために技術やデータを利用する

そのために、不耕起栽培を行い、オフシーズンにはカバークロップ※を植えて土壌の健康維持、生物多様性を図るとともに、GPSなどの最新技術を取り入れて水の有効利用、エネルギー使用量削減など、環境に配慮した農法を採用している。

2013年からは、アメリカ大豆輸出協会（USSEC）による「SSAP（サステナビリティ認証プロトコル）認証制度」が始まった。これは、上の4つのルールに基づいた「サステナブルな農法で生産・管理された大豆であることを認証する制度」で、認証を取得した大豆製品は、商品パッケージの消費者が見えやすい場所にSSAP認証マークを表示することができる。日本でもこのマークを付けた大豆商品が急増中。コンビニやスーパーでマーク付き商品を探してみては？ AD

※クローバーやオーツ麦など。作物を作らない期間に、土地浸食や土壌圧縮の予防、土壌栄養分の改善、雑草管理などの目的で植えられる作物。

お問い合わせ
アメリカ大豆輸出協会（USSEC）
https://ussoybean.jp/